慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	江戸時代の男女關係(田中香涯著, 黎明社發行)
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1926
Jtitle	史学 Vol.5, No.4 (1926. 11) ,p.163(623)- 165(625)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19261100-0163

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

に於けるがごとく、實に解きがたく、不可思議なものである。萬物中の最も靈妙なるもの、最も驚嘆すべきものである。人類の出現と由來、その營む生活、その創造する文化、その身體の構造と機能、一つとして興味をそゝらざるなく、重大ならざるものがない。が同時に、またその研究の、如何に困難であるかは言ふまでもない。

もちろん、わが學界に於いても、斯界の專門家が、すでに多くの尊い勞作をのこされ、殊に最近に於いて、小金井博士の『人類學研究』のごときは、單に博士の唯一の論文集であるばかりでなく、またわが學界の紀念すべき好著である。その他佐喜眞興英氏の『女人政治考』も、原始社會の研究に對する警鐘でもあつたがしかしそれらの著述の多くは、人類學の一方面の研究にすぎなかつた。しかしながら學問の普及は、專門家の深き研究のみによつてとげられるものではない。吾々は、それらの專門的、或は特殊的研究の成果を採收して、その學問の全般的範圍を概說したる、綜合的著述を要求しなければならぬ。この意味に於いて、こゝに紹介せんとする西村教授の『體質人類學』は、當然吾々が、その出現を期待しなければならなかつたところのものである。

本書は、かつて本誌上に紹介したる同教授の『文化人類學』の姉妹書であつて、まづその緒論に於いて、文化人類學と、體質人類學との區別をのべて、前者が社會人としての人類を、後者は自然人としての人類を取扱ふものであるとなし、さうして、倫敦大學の人類學研究室で發展した人類學の分類法に從つて、體質人類學を動物學的、化石學的、生理學的、心理學的、人種學的の五方面から考察し、人類が匍行から直立に進化し、その結果として上肢二本の自由をきたし、腦髓の一大進化を見、他のあらゆる動物から區別される狀態にまで發達したることを、他の動物との比較や、人類自身の遺物から立證し、最後に人類體質の將來についてのべられた。教授自らその序文に斷つてゐるごとく、本書は、主として『綜合の材料及び主張の骨子を、學界の定說として認められてゐる諸名著から採擇』してなれるものであり、從つて教授自身の見解をあまりうかがうことはできないけれども、しかし人類學概論としては、わが國に於いて始めてみるところのものであり斯學の普及には、最もよき參考書であつて、吾々は教授の努力を多としなければならない。（松本芳夫）

江戸時代の男女關係（田中香涯著 黎明社發行）

人生の暗黑面の觀察と研究とに興味を持たれる著者は、江戸時代に於ける男女關係の暗黑面に着目し、糜爛しきつた江戸世相の一縮圖として、それを描寫したのが本書である。記す迄も無く、江戸時代に於ける兩性關係には、今日より觀て異樣變態なる事實が多く、本書は、その大要を說述するに務められた興味あるものである。次に讀者の參考迄に內容の一端を紹介して置く。

將軍大名の閨門——御家の長久御子孫繁昌といふ好口實は、將軍や、大名に、一夫多妻の習慣を持續せしめた唯一の原因である事を述べ、その荒淫放縱の生活の狀、閨門に於ける停年制、並に迷信、或は其の他の事情によりて行はれたる產兒制限等に就いて述

べたもの。

御殿女中の不身持――女犯――江戸時代に於て、禁慾生活を餘儀なくされた者としては、男では眞宗以外の僧侶、女では、即ち御殿女中であつた。然し兩者共、多くは自然の要求を抑壓することが出來ずして、醜行を恣にした事實を指適したもの。

縁切寺――男尊女卑の最も甚しく、極端に女性を壓迫した江戸時代に於て、不幸不運の妻たる女性が、最後に取るべき唯一の離婚手段としては、所謂縁切寺の駆込より外に途がなく、鎌倉の東慶寺と、上州世良田德川の滿德寺との兩尼寺が、この擁護救濟所であつた。猶この駆込は、この兩寺に限らず、例へば大和の中宮寺門跡（尼寺）等に於ても功力があつた。本誌第二卷第三號所載拙稿「中宮寺日記より」參看。

不義と密通――「不義は御家の御法度」とあつて、武士の家にては、主人或は親の眼を偸み、私通した男女は、共に打ち首になつた。然し元禄以後に於ては、武家の風儀制裁も弛緩して、私通した娘を窃かに裏門より遁がし、離籍することが多くなつた。町民間にては、不義と稱せられた私通も、それが有夫姦に非ざる限りは、必らずしも貞操問題を以て律しなかつた。又私通に對する制裁は、比較的寛大なるに反し、有夫姦、即姦通に對する制裁は極めて嚴酷であつた事實につき説明し、かく嚴酷の制裁ある姦通の多く行はれた原因として、（一）女子に離婚の權利のなきこと、（二）女子に、性慾滿足の機會が、充分に與へられなかつたこと、（三）交通機關の不完全なりし爲め、夫の旅出の期間の長かつたこと、（四）姦通は、本夫の心次第で、その罪を宥すこともあれば、又姦夫より金を出させて贖罪せしめたことを擧げて居る。

情死（心中）――心中なる言葉は、心中立より出來た心中死の略であつて、相愛男女の合意的共同自殺の意味で、これは大阪に於て天和の頃から流行し始めた。この流行の有力なる暗示は、近松や、紀海音等の著した豐富な詞藻と、艶麗なる文辭を以て情死を美化し、詩化した、所謂心中文學であつた。上方に於て、漸く下火となつた享保頃、江戸にては大阪より來た宮古路豐後が淒艶の調を以て語る心中淨瑠璃によつて、不知不識の裡に暗示感化を受け、心中沙汰が頻發するに至つた。こゝに於て幕府は、心中淨瑠璃及び演劇を嚴禁し、且つ情死未遂者に法律的制裁を加ふる事となり、又心中の文字は合せて忠の字となる處から相對死と改稱させた。猶ほ情死者に、實笑婦の多い事等仲々面白く記述せられてある。

男娼――天保の頃まで存在して居つた非倫醜業者に就いて説明したもの。

江戸時代の私娼――公私兩娼の區別は、元和三年吉原の設立公認より始まつて、その設立は風紀的管理が其の主なる目的であつた事を述べ、私娼の種類より、その禁止制度、並に其の困難なりし狀を詳述したもの。

江戸時代に於ける長崎の外國人と娼婦――長崎に於ける出島の阿蘭陀屋敷と、對岸の唐人屋敷に出入の娼婦に就いて説明し、外人に對して、何事にも苛察に取扱つた幕府が、獨り公娼の出入を許可するの寛大なる處置は、主として、長崎港の繁昌を謀る政略であつたらしいと述べて居る。

體筆漫錄――姿の異名の外、十六題に就いて記述したもの。

以上は本書の極く一部の紹介であるが、江戸時代に於ける相世史に興味を有する人に一讀をすゝめる。（武田勝藏）

民謠をたづねて（松川二郎著　博文館發行）

最近、鄉土色の豐富な各地民謠の蒐集、紹介、或は其の比較研究が盛んとなり、それ等に關する種々の著編の書が、公刊せられる事は誠に欣賀すべきである。今度、旅行家として知られる松川二郎氏は、前記の書を上梓せられた。これは、各地民謠の歌詞、歌調、並に其れに伴ふ舞踊樂器等に就いての見聞、並に各方面よりの觀察を輕妙に記述せられたもので、自分は甚だ興味を以て一讀した。氏は本書の序文に於て、次の如く叙說せられて居る。

民謠は、即ち無名の地方詩人に依つて作られた詩、國民の間に自然と生れ出た詩、その中には、國民の生活そのもの、或ひは地方の自然そのものが含まれてゐる。民謠の價値と面白味は、その點にある。○中略　私はこゝでは、單に地方民謠の中、すぐれたものを選んで紹介することのみが目的ではなく、或ひは文學的に、或ひは社會的に、歷史的に、地理的に、いろ〳〵の方面から觀察して、出來るだけはつきりと、その唄の含む地方色と云つたやうなものを、描き出さうと試みたのである。

本書には、各地民謠の大部分が紹介せられてあるが、猶ほ漏れて居るものが若干ある。例へば、對馬の民謠の如きは其の一て、同島は、我が西の一孤島ではあるが、島の民謠として紹介せらるべきものが三四種ある。（雨の降夜節、陽氣節、辛氣節等）殊に雨の降る夜節は、稍や悠暢で單調ではあるが、長閑な品のあるものと思ふ。

序で乍ら附記して置くが、本書の著者も云はれて居るやうに、民謠は野趣滿々眞情直露の爲めに、昨今其の歌謠舞踊に、改良を加へられたものが往々ある。それは眞の意味に於ける民衆的舞踊の形を失ひ、又ローカル・カラーが褪せてしまうものである。それで改良も、時代適應の改良であれば惡くはないが、それには十二分注意を拂ふ必要があると思ふ。又最近十數年間、年々歲々に新作される流行節の傳播力によつて、祖先の殘した貴重の鄉土資料たる民謠が、段々に衰滅して行き、青年の中には、殆んど忘られかゝつて來た時に、先般日本青年館等に於いて、各地の民謠舞踊が紹介せられて、その保存の必要を世人に知らしめた事は、自分等のやうに、民謠保存を叫けぶものゝ感謝に耐へぬ處である。

最後に、本書は、俄に首肯し難い一二の說もあるが、民謠研究の好參考書として民謠愛好者、研究者に一讀を勸めると共に、鞭旅の好伴侶の一である事をも附言して置く。（武田勝藏）

石川縣天然記念物調査報告第二輯（石川縣編）

本書は、石川縣内に於ける、天然記念物保存の目的を以て、大正十四年度中に行はれた實地調査の記錄である。收錄せられてあるものは「はまなす」外四十余件である。記述は、所在地、現狀由來、保存の價値等の細目に分つて頗る詳細に亘り、加ふるに、